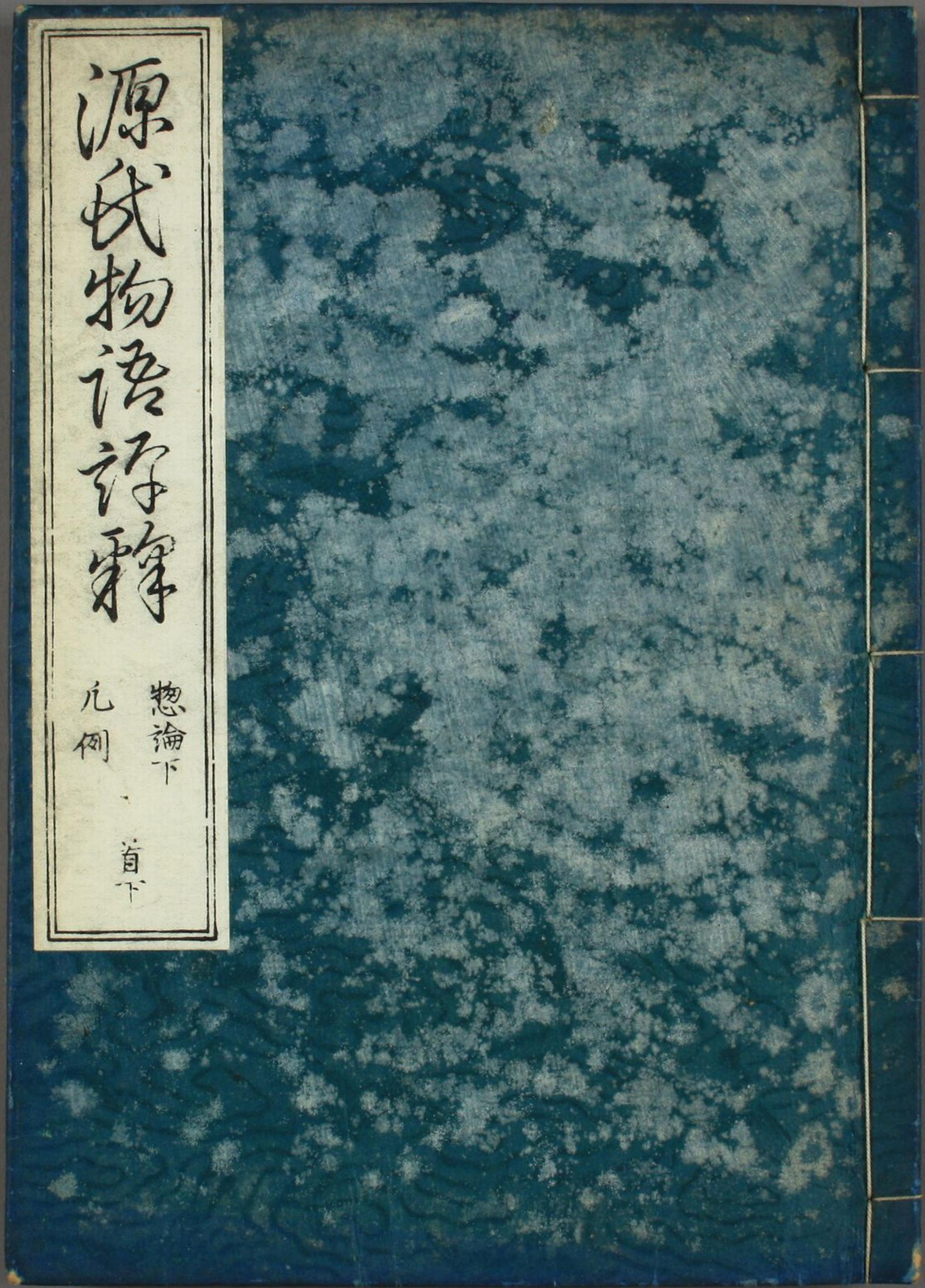
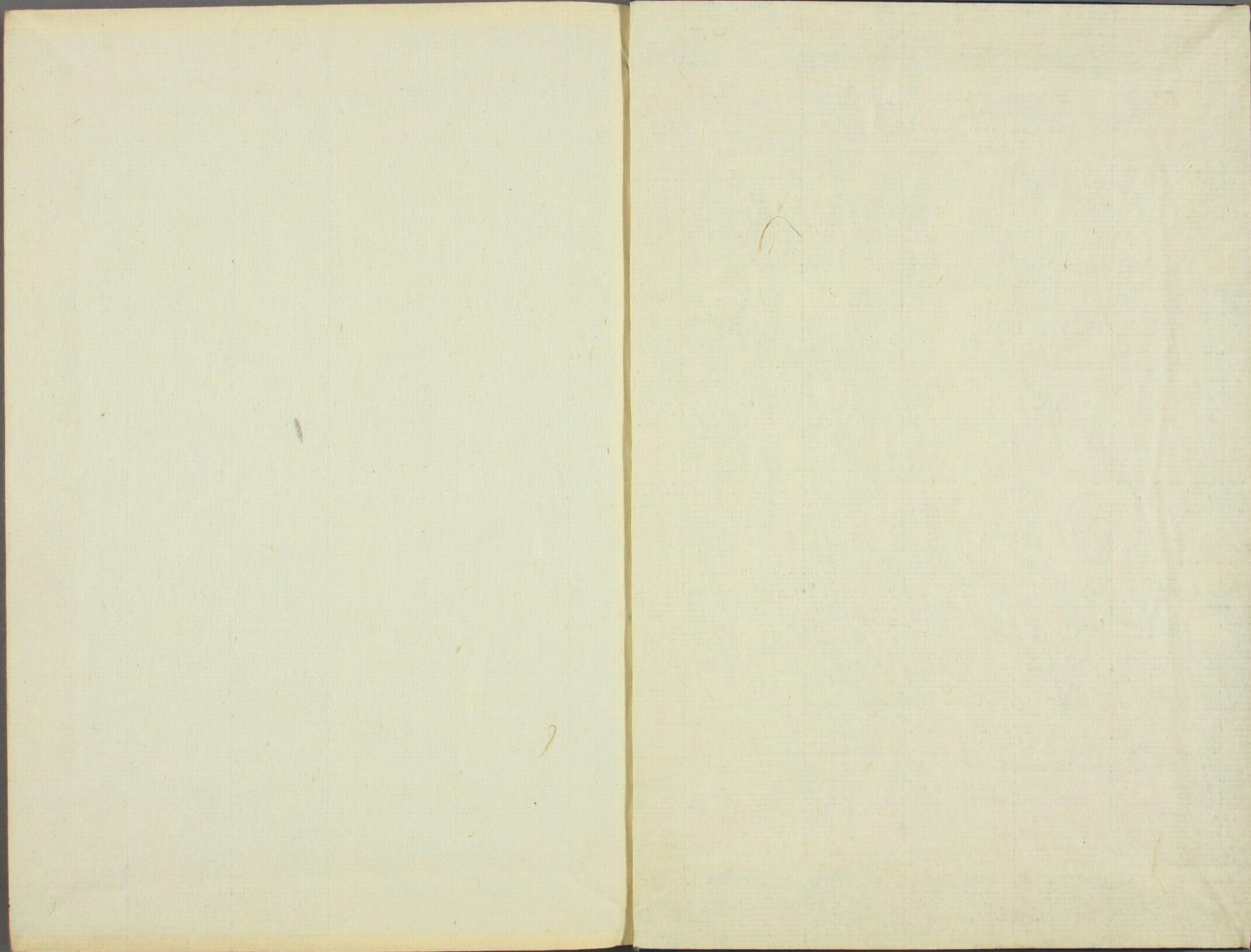


6 7 8 9 10 11 12 13 14 15





總論下

此物語のちくまくは本ハ源注拾遺玉本抄かくもきのうどく河海抄を大般

の抄は始なうる。極までも琴沖のいもよアマヤウル暗記の復なうじよや
あん葉の書かうとて引出する「とむ」の字より「とむ」といふがど
きく。又「かの句なども本集とへられられぬようある」といへあります。
さうなるやへたうづて本ちやへ。や次ハ花鳥傳情がうされり
大くは山海によれらるるもの多く、又得する件クサリども、わうびへく。
りそくかへ従ひざ。や次ハ蝶花・細流・明星・孟津・岷に入楚・萬水一
露・湖月抄などなればぐちうもと、本居宣家のいわく、「とくにこれ
がくの抄どもを引出そ。すこべづ考を加へれるのみかでござつてうまる
ね」となり。やや小細流ハ一くあつてややくもとく、管のおとづれ



いづれもかくはうとくもうるまく。御月折ハ、所説も今接よ。またぐの御ふは
くちからかで聞ゆるのもうるハ、またぐの御ふもとへぐれて、その御
しに従ふがたを。されどもくへ、底に入楚よりぬれ出でりとんむる
事ありて、人楚よりかくはうとくも。またぐふ達くはうとくもあら。此
抄ハ、文を山あら、筆を枝^{アリ}草モ、縛やとてがふや。今世よりてあるよ
ね。大うき紫^{シモツ}あくねひな。御書^{メシテ}とたうやいふよも、だやうすうとくわらおた
よ。玉小括^{タマハラフ}、并へらまつるうごとく。御書^{メシテ}とくの御書^{メシテ}とくも、
をかくは抄ども、がくへせのよるうかふらうのばくうきくゆふ。
時代もあやつへ近うとがくはくとりくへじとものある。今
まくとくとくとくといふと考ふと、大うき中昔よりかくの御書^{メシテ}とくも
よハ、あぢ見あき一^ツの癖^{クセ}ありて、行幸のうふも、所説がどりひて、せざるやう
なたとまでも極ら^{ヒタチ}、事ならうへふがくおどもとく。二人二人よ

ゆく^{ヒタチ}秘傳^{ヒタチ}へ。あまゆくへよくすみをふとくわくなかうじあくまうり
し、ふ古の書どもを又集めて、事の證^{アキシ}を考ふるなどとの学^{モウ}も、あくそくうかう
し、ばくかくと一^ツのうふ考へゆくと、暗記^{シラスガエ}のまゝふ注^{メモ}へつけれる
數^カも多きあふぞあくま。又考^{シテ}公事儀式、或^ハ衣服調度の故実^{カシマ}がくする
やんことあくはかくて、酒をくれる事^{アリ}。御書^{メシテ}ハ、神不誤^{ミス}たるべく
なきとぞれ^ハ、古の書と相て^ハて、夕られ^ハ、御^ハいふとくにたゞくの年とか
もあり。案^ハ、古の御便^ハとて、一條院、天皇の御時より^ハ、そこの年の年とか
さまで、令式の御制度^ハ、やうりへ、あくま、あくま、あくま、あくま、建武の
乱^ハ、大内のうりとも。いづれ古ふゆくと考ふ。注者^{トシハ}いひ
きくとも、たゞく乱^ハ、故^ハある事^{アリ}。とくとくも、あくま、あくま、あくま、あくま、
あくま、あくま、あくま、あくま、あくま、あくま、既^ハ小注
教^ハおきゆくとて、もとまつたる本^ハの知^ハレしむ^ハいひだ。

然きバシのうかはれ説どり。又ひくむたよしきみがに。またバ今ハ湖月
抄トテいきれどもハ舊注と称アリ大々よハ漏モラトテ。されど事のまゐれ
達をすくへ。先舊注より書きてゆべれことやうなきバ。十小二三をも
あつて。さて契沖やうしの源注拾遺ハ。右の舊注どものキモツ條じも
をあきゆく古書ども参考へて。やまとくに本どもを論ひる。あく。
いともむくめでんかみ此へよふらう。さうもうへ。古生まふわせし
お集行きの説どり。かの私傳などやうの説よハかゝる。古生まふわせし
て。を実を考へ合せられ。浮きとハひともたゞくして。近きよいとゆる
考證字法も。あひ原々うされば。の拾遺小。お御のちうけられやうも
いづく改まりぬま。これようあが。あるを。新注と。ちりく引。ちりきと
きこの書ハ。大う。舊注の誤を正。まとのせんとせられ。き。が文のうへふ
うけて用ある。まひとすまか。されば。正鏡をとれ。もと又いときうも。

さるハあづ一の論ハ。引出くと。ギ文よじ書きあふ。あづう。極カニ。
ちく。此書ハ。近きこう。板かき。うふ。せふ。弘。ま。れ。と。い。う。あ。う。と。ふ。う。と。こ
り。き。う。條シナリ。ども。あり。て。し。ま。の。の。れ。る。字。か。又。玉。小。精。源。注。附。滴。など。小
引。ま。う。る。條。ど。も。の。脱。く。と。彼。が。あ。う。する。不。ど。も。ハ。字。を。ま。く。解。説。な。ど。ト。う。
う。て。引。く。も。あ。づ。き。る。か。と。板。か。と。あ。り。ね。と。精。よ。べ。う。と。そ。次。ハ。岡。部。翁
の。新。新。と。り。あ。ね。う。され。考。一。毫。ハ。此。家。七。論。と。せ。小。板。か。き。う。て。行。く。き
ち。う。さ。く。れ。ほ。ど。も。奉。ら。ま。る。所。あ。る。ハ。こ。そ。じ。む。と。も。不。従。ひ。て。だ。う。や。これ。く。れ
き。か。か。く。文。法。を。こ。と。あ。り。ま。す。す。け。と。う。し。の。よ。ハ。凡。例。よ。り。が。ど。く。
さ。と。相。重。き。と。う。次。の。ち。く。と。れ。や。う。ハ。舊。注。を。ま。づ。へ。用。わ。と。注。せ。れ
く。く。ふ。や。舊。注。と。今。接。と。お。う。む。ち。ん。な。く。して。ひ。づ。く。紛。ら。う。た。を。彼。が
う。べ。ん。く。今。接。の。う。を。の。門。出。く。と。み。草。ハ。美。や。け。う。と。ね。ぐ。ー。く。

あらがふうすこしも二やうあう。附漏よるハズベのむかとよみて。ちかくさざる所
どもう。わのづかうる二本のうちよハ別記のうる。後少改めへきる
ものと見て。ちかくさざるはうきあらう。すこ一筆とてびうふかど。ほ
考へれりとおだいたまどむ。おもじる別記のうる。字一
さきいとこくして。達也と所とおけ。ばざんくたうして。もあみの稿本と
凡やうくもむひと用ゆつ。其事の大むせ。かの考ふもいもれるがご
とく。たゞ、訓説のとびひとからくる所とおいて。いとぞ見論がよもあれ
ど。れりもむゆもあつて。きる條ともハカレヒツ。されどやむひととおねふよ
ハうぐ。出く。ひのうとくとくとく。次小加藤守方伎の雨夜物語もみ
詞とりあめのあり。こそハ帰本考のふ字は解小て。ふくふ俗讀をくりとく
注へこう。モ説とも。たゞ國教翁は傳へらきつるるやうて。秋萩と同くされ
令はくも引出ださそく。左居翁のふ小序ある。おまハお讀といふかの

すべひやうと論ぎれりと。ひときまやうふして。ちるより。も數あくまうと
ち。中やう作うやーのあくまうひと。其極度の中かほとたくくすもて
ひときまやうをそく。ちくはまくふと。ひときまやうと。ひときま
ひときまやう。かくもひときまやう。がくなんも。おのあれをもく。お陰
のちひとあることなるよと。ひときまやうあくも。苦よの涙どもかくもて
ひときまやう。彼まの一二のひときまやう。がく。へくふかゆづ
ひときまやう。もひときま。かく。ひときまやう。がく。そそくの泣歌のう
も。また。かく。おども。とふと。うか。かく。ひときまやう。がく。おのをほ
の格。詞のうく。様な。此翁のせよ。おれ。ひときまやう。ひときま
ひときまやう。を。もくめて。あく考へ。おまうまやう。がく。おまうまやう。がく。
おまうまやう。がく。おまうまやう。がく。おまうまやう。がく。

ひきのほうひきあはせかくもて始てあきらうかなもつてぞいもほしもうか
 なうばだうむすまの心やう。人情の心もかくもふく考てねくへり
 とくやうとくゆうて。小説どもひとわざやう小強説とよやうとくひり稀。
 すべてのちくまくのふいあいだ。何年の説かても。人情の心やくあると
 あるにまづか。やせなきぬ。作るのをがりともとく。今の人れおきく
 所すでも。ゆくらひもりておとせり。理ハ理とく。がふさかうとくうり
 あぬりのあう。此翁の説はうるうまでやれううひく。がふとおぞやく年
 それううう。おきバせぬけりで見てようう。注とく。注のやよハ。このお
 小擣よナキ。おひくもたく。伊うぬのまくおじくまれるうとく。おきれ
 ううとおじゆくまがう。このお擣ふきるかんあううる。こまきがおあぐ。おほ
 むやうあきと。他のおどもとくべんて。よくく鳴ひまく。御みをせま。い
 く年老てのせれほううて。お擣ふきようあく。注釈いとくふくして。

もうたこきだうりよまづめられうのまくハ。ひりうあくじくうじ
 やううなうある。おれバ若生氣をうで。ひとと彼説をとくからううう。
 末摘花裏よりトハ。おひぢかううとくのむひととおへ。彼説をとくううと
 のむひとハ。まごと説のたううだく。他のおどもよハ。いぐくわがゆうとくの
 まうう。おへんらうづくとく。拾遺新釈のきもとくども。取ざる
 ことハかじやうて。やがてだくとくめを。小擣ハ。あくいうふぞくやううたう。
 大きよ出であがくふくのども。見るは後うかるがふくとく。弊多
 のくはくよ。通がくやうかて。ひととおひぢかう。おひくもとく。大くのめでくまくよ
 おひくもく。初学のやまなうが。おれがくまくとく。おひく數もあくべーとくう
 く。おもとくとく。おとくとく。おとくとく。おとくとく。おとくとく。おとくとく。
 尾張人鈴木氏がかけ。お小擣補遺とりの二卷あり。小擣の中ふくされ

もと拾遺新穎の二抄より引出で、がくべく今按をくふく。寒くればり類例がく。所くらむかねあどを。がく書ふありせて校へよ。句のくびくを引直し。又はのう本を挙て。がく文をも校へ含せ。又語の注をとるは。あゆわ書じもの中より。や類を聚めて引る所もある。便よりすがくぞ。あやうくもとで。近きをすりて見る注解もある。がくふかのがくもくめおもきべきこと。もくくぬをべつべさんとて。右の抄どものがくとれぐくづりどもを。がくふぬをりて。ほくつとの足ざるやくろよ。もひが秋トキコトをりのへつみかか。さてちくまくの外小安藤為章の學家セ論とひのひり。必ひくべし。此人をたどりて此教説をぬく。あくの家説を

も笑。後小紫が教日記を傳ぐ。がくづく黒式部のくずくとまとくしきば。あくづくをとるよ。そまの後アフタ。卷中のおりかた。上ふもさばく引出する。ごとくねふて。此教説の大じひを傳ぐ。彼日記を教説法より合きて。式部の才徳のいみづくし本を称し。えむくづくのほどもひいそれるひうことを論ド破アセ。いとあくづく多ナ。但一ふ小柿ふくの太むねくわく。この人のまことの例をのこせひて。教説とりのひのく趣をふりだ。といふこと。あくとて。大うそその舟へどのかくあるのと。されど小柿の説もあく。いふよどやかの始の説よて。源氏控きよゆくぬまく。あく。小村久備といふ人の著を。またみき草といふ。す。小柿ふく。系図を伝ふまく。こひこひこひこひ。いとすあくとて。ちくばどりをきく。をあらねと。ふくひく。此教説ふく。ふく。の系図をあく。あく。又小柿の年立。圖よなうひて。今。也

委して年立の國をもじりて説くもの。其ノバ系國と年立との事、かのまたとひるふ事にて、今ハあつて出だ。彼まゝをどうして又今も今。さて又熊海氏の源氏外傳とりあがめう。此書のよりハ小様小論ニホンノシキがきく。いさむ外傳よりて、拙法よりむはさへ小用なむれ。これにぞみ京少くやんとかれぬ。かのぐちて經濟の儒學を傳へし時。この拙法よりて、やうを解するのと傳へすね。がふさるはすのわともちて。うべくとせある條もむれど、本文はあぐくぬあぐく。たまバ、今も大きめうして哉ぞ。

引奇の事

拙法の事にす。記すをとて一句をうち引出で、半の詠歌をひきとくませ
くる。その中、あるを苦より引、又といひあるを、あり、すある不持小めでくして。
事がれあり。謡方み、もまた小字あるをもく。がふねけりである。

がどくとせなうでふ。がうハさひよふるま。と度する少し餘りあり。
さてとくまつる。古ハ古今集をくめて、後撰拾遺六帖をくみて。
又このほりや一の解すりあひ。それあくの集が生れるをあると、奥入河海
あくふかいあひをして、安らかに。や後くのおふり。次くよしとくらまつて。御承
その辺きくよども。そのをすとくべて、夕々ハ。詞のまづくらむもく。或ハ
をまへきどぐ。又ハ行の集がじくね、すがくもありて。いとぞうとくまくは
持手。新秋小柿あくふま。いそれとくもあふ。胸滿小柿小乞して。そ
キとくとくして載すり。されど、君のこきるもまく。さのやもねうももま
きうる。新秋あくふハ。注者のぞうりふつくりのせうれするやうふまく。され
て。御承ども今、よハうせて、おもねえ集も。をせよ。あうてはあしきんを。
いきまつる。あるべく。或ハうせの集ある方。写すひがおどして。却て、うべども
きべをせば。もうあれがちふりふくもあべ。されどもまよひ小柿小柿

おどりて見ゆど。まことに見てなうとしむ室めぐらしや。又牛のうれいと。さ
と門へて用あふれむもむちも。仕事のほんまくしあつてのとくわれば。
そもハ今うりうだうふいあいば。やかくよほするがごとし。さて又湖月おがくよハ。
じまのふよ。かゝる点をうる份あるふ。を思ひておおはりすたうぬふいと
おい。じまとりふは。やうのきをしきがく。かざき。ばり物。うだがうのきも
ゆくねえうれす。おはうとひやうの伝をうそうそうれうとおひくも。
あやどりくるみとなるハ教數例のうぞひ。されば今ハお、じまのふおもす。
一合をうりてうて。モ解ハ。解よ。やあととはづ。

准撫の本

舊注は准撫とりありありて。相壹帝ハ醍醐天皇小准^{ナツラ}。朱雀院の帝ハ
村上天皇^{ナツラ}。准^{ナツラ}。源氏君ハ西三條右大臣光公或ハ西宮左大臣高明公。小准
あるあどり。又夕朝の侍^{ナツラ}。院ハ。源^{ナツラ}。左大臣融公の河原院小准^{ナツラ}。ヘ。昂木

の中川姓家も。藤原^{スズキ}相如^{サクニ}御^{ミタマ}の家^{スル}。准^{ナツラ}。たゞどりの敷ひのう。ごれ
やひをひひりてゆく附^{シテ}。似^{シテ}。もいとおやうれど。あおがちふくら人のう
とさくあて。准^{ナツラ}。へ。うふいあいば。ゆつて。うゆうくもいひ。彼此えま
つて。やうげをかまつて。なまは。まううと。いもくよハ。がまうりかまう
たまふ。又あうひしと。あまううと。ハ。まうて。なまれば。まつひよいづく。
まき^{ナツラ}。巴^{ナツラ}。小様^{ナツラ}。ふりをまつて。とてもかくでもまべに半^ハ。今ハ卷^{ナツラ}
きし。うち。日本紀^{ナツラ}。序局考^{ナツラ}。源氏君^{ナツラ}。を邊城。天皇^{ナツラ}。小准^{ナツラ}。相壹帝^{ナツラ}。を桓
武天皇^{ナツラ}。朱雀院^{ナツラ}。のまを平城。天皇^{ナツラ}。よ冷泉院^{ナツラ}。のまを仁明。天皇^{ナツラ}。小准^{ナツラ}。て。お
かうと。仰^{ナツラ}。事^{ナツラ}。ども。を門^{ナツラ}。かく。いもまつて。はやまで。相壹帝^{ナツラ}。へ。りづまの序局^{ナツラ}。まし
きのまを小准^{ナツラ}。と。りすく。源氏君^{ナツラ}。と。あく。源氏^{ナツラ}。を紹^{ナツラ}。と。よるべ。

中川のやあらや附の紀伊もううをひらぐへ院もううへ院と見てあるべし。
もくまでも又まくらでくらあくねあくもあくまくは、舊説によひれる
事とされば、舉る數もあるほどしてやむと傳する。すのふかこ
とくらがめ。また又相筆者ふ。も恨哥の画を。すのふ院のかせゆひて。伝説か
要えふうよ半をりへも屏風のすあるハ。伊勢某かも又これば。實より
あからう海か。されば亭子院の事は次ハ。延喜の事は小字や。相筆者す
延喜の事は准へづくもりはばたびくならど。ゆくと。それひくもじに
あすた拂屏風か。せぬされ周かどうかくらみかて。これかより
て相筆者を延喜の事は准へづる證ふ。あくと。須磨事よ。千枝事則といふ
きいたのとくも。やほの上もといひへ人あるがとくとくの數ひ。
さすがさるも。どもさばほくらひすく。とくとくある。くと。りくふ直の
人のことひきてよむべたなう。

卷之の名ども北本

此物の事はものとれ。され未かりやもするすや何や。かくとも
よ取出くをうけし事と。諸抄よいもれしるがと。これと天台の
圓門^{ナラ}よ准へ。も詩の名篇小比^{ヨリ}かなとひもすく。舊注のひづくともも。
新注ども。すへらきされば。こまもまくらふいもじ。新註の序本。未ふ。
舊注をすへれふ。此物のうじも。いとからん事よりつけふると。
其事かど二つある。すれど古たまどものものやう
も。それやまくらかのとがくもやまくらかのとがくもべーとひもれるハ。
まくとくはくとくとく。されどもれよく考験だ。いきくらばくはくもゆのむ
あくひあく一年うとがくも。こまくらきだくとく。こまくハ哉のまくと
まくめかくとく。まくとく。

久の名北本

せぬ事へやうむとおやうやかすぐて人の名をいそべりく。たゞ
そのあ後れ詞つゝよく。その人姓とよやうにわかる。はまと
ひひみどりすとりべー。されば朱雀院のみど。冷泉院のこがどもど
すくはも。さうあらわせまへ。後かられおもへりにあれ名をりてやし
しまふ。か。実ふ芳おもへり。朱雀院天皇。冷泉院天皇の御本ふいあ
む。半弓。惟光良清時方あどり。二三人かの名へある。ど。こまもさう。家
司めたらる人よ。うげある名を。うきと。ほりくいつなまび。されもれかうの
名たり。又上かもいへ。手技常列など。の數ひ。實よき一人と。うやうと。され
まはすよりて。うき出るかたまき。お箇のすぢに。いきまへもあづくね
半弓。それもあるすくみえ。る人。御本なれば。まへて。名あく。て
日うち。ぐれん。あもあも。あも。がく。ふと。あへ。名。も。は。う。じ。き。も。く
作者のつけれるも。いとくと。うき。半のま。あよ。よ。う。ハ。や。ほ。の。も。と

帝本とも二やうふいへまく。まへて。まへたひまく。まへあ
らば。まへた。まへふと。う。と。され。本と。まへ。あま。で。ふ。ま。く。の。ま。く。
北村久備がす。毛草の凡例。云。帝をそぞら。も。ま。せ。の。名。を。称。へ
り。ま。う。う。先。相。主。ま。と。や。ハ。相。主。ま。ふ。か。く。か。る。帝。な。れ。ば。後。小。ゆ。名
を。よ。も。人。の。其。帝。と。こ。う。料。に。か。り。小。名。附。る。か。の。そ。お。後。の。御。小。相。主。
帝。と。ひ。ま。う。ふ。ま。く。と。ぞ。く。の。名。も。小。因。ド。大。は。も。納。も。皆。人。と。も。あ
あ。き。バ。何。の。ち。だ。尚。大。納。も。と。か。り。小。名。附。て。や。く。を。こ。く。ち。く。る。あ。う。か
く。を。ひ。ま。う。ふ。ゆ。後。の。作。り。み。と。か。り。小。名。附。て。や。く。を。こ。く。ち。く。る。あ。う。か
く。と。も。後。の。人。姓。と。か。り。小。名。附。て。や。く。を。こ。く。ち。く。る。あ。う。か
く。光。源。氏。匂。丘。の。姓。と。か。り。小。名。附。て。や。く。を。こ。く。ち。く。る。あ。う。か
く。中。ま。槿。夜。院。を。ど。り。か。れ。あり。秋。ね。ゆ。あ。を。お。後。の。词。よ。ハ。秋。の。は。か。く。と。の。
きて。秋。ね。と。ハ。や。く。と。槿。の。夜。院。も。朝。教。の。姓。も。と。す。も。され。朝。教。の。姓。を

源氏君とよみかへりひきバ。その相手のうすみひー様をとよ
みあき成後よ毎院よ放ほあふ。おぎくつよむ人のうづけて。槿毎院と
やへたう。此外、まこと小園。人名を後より称へるある。おやふ
こつあり。あと詞とふよりてねほき。ハ。毎月秋肉侍。ま井原などあり。
ちの役をまめの名とも。も人の名ともしてくる。ハ。紫無紺。文。毛葛。君あ
どなり。また名よそりている。ハ。相壹。帝。竹川。左大臣。紅梅。左大臣。葵。上
あどなし。傳ハ准へくさ。べー。といふ。たゞうみすせき草の系園。小。モ
くの下に。其の名れや名をもほりきバ。妻。く。公生。成元。とくかくし。
くみゆきめのつむると。よむ人のつむるとのうちを。ハ。先。よくらむがり
がき。ハ。すみくわくらむ。まくらたすも。出まされば。うかびつまきま
へねくだまき。また又。御月。おぞむれやふも。くのおりか。いの宿の様。小。
某甲。ム。某乙。同。など。記を。おあき成。くの名れしまさ。あらねざるを。も。

平標をつげたり。きとヘバ。弔本表。よ既中。ぬのなぞ。これ。すよみ。する
女の半を。落。く所。よ。夕都。と。ち。て。る。敷。れ。ご。と。く。と。き。ハ。後。小。ノ。紙
を。ふ。て。夕都。の。う。よ。す。一。女。を。き。ぐ。く。と。ハ。う。き。き。じ。ど。き。う。や。人の
あ。く。す。み。え。う。ち。よ。す。一。壁。の。う。底。ひ。き。す。一。う。り。て。ハ。修。め。の。ふ
よ。ひ。あ。お。た。く。後。お。あ。く。一。出。る。時。う。り。く。を。く。一。か。ん。と。か。く。
う。れ。る。ま。く。く。く。う。一。あ。ひ。く。い。と。あ。ぢ。た。あ。一。き。き。バ。今。ふ。い。も。く
く。一。て。に。き。と。と。と。ハ。う。る。か。の。お。あ。だ。成。又。あ。き。て。る。人の。な。う。く。ふ
り。う。る。も。べ。き。き。バ。と。そ。段。す。の。紙。ど。も。よ。ハ。う。の。人。と。ま。う。ら。を。取。ち。て
う。ら。を。け。ま。ご。と。せ。ね。修。を。う。ま。く。傳。試。ん。と。あ。り。か。人。ハ。修。よ。ち。く。く。ふ。て
其。方。を。と。ま。く。う。わ。た。て。ま。て。後。某。甲。ム。某。乙。同。など。り。く。と。と。も。あ。ま
キ。と。ま。く。文。の。う。を。ト。す。あ。ぢ。と。あ。だ。も。べ。一。り。ひ。あ。く。だ。め。で。く。お。す。く。う。き

所どもハわんたゞう。

年立の本

此の後トシタチの紀年は又ハ玉小柿タマコシタチとすを草小園クラシタチをつゝりて、ひとくく
ちとくとくされば、とまきふやづひて今人ねえだ。これハ和歌ワカどもなむべ
きとくとくさて年立ハ源氏タケシマの齡ナリをめでてほじけめぐらむのたるやふ。
おほのあじ年タチをゆくあると。彼者ソノハシマシのくわいあり一年とぞとくう。
そきソクハ先ソリ相シマサと帝アメニととの間シマツ小物タチのあらわ。相シマサハ源氏タケシマの
本侍ヒラシマて、手ハンドをかくせりやうとがなまきバ。わくあふたうきわざのまと
紫シシマツ小着シマツをうふて、さうて漏ルる。そ次ハ花宴ハナイダと葵アメニとの間シマツ。一
ぐれの物モノなり。こまきハ相シマサおとむせまし。朱雀院スザンノイの帝アメニ侍ヒラシマ
よつまきやどヤドの本ヒラシマあるがふ。ひざとくらうらをもくとくもがれる
うがちゆくわゆづの年タチを委シマツひとく。さあくのまどもあつて、回シマツ

すらの重ヒヂマツあるべくまきハ、省シマツうまくまくろ。よくもあられ候シマツ。省シマツうまくハ
かくカクとゆせあがくもみくなく。その次ハみをくうミモクウのまと繪合エイガまとも
間シマツ。また一年立タチの年タチ。こまきハ朱雀院スザンノイの帝アメニおとむせまし。冷
泉院リョクセンノイのみくど侍ヒラシマよつせまし。その年タチ。またやくと葵アメニの下シマツ
よ。どうかくて年タチうまくまくろ。うまくまくろはとうせたびて十八年
小なきまくひねシマツ。あるま月ツキもかまくうてとうせたび。源氏タケシマの年十二よ
す。軍シマツまで。四月シマツの物モノとて、首シマツして。軍六シマツの年タチ。冷泉院リョクセンノイの帝アメニ侍ヒラシマ
ゆづの年タチをかくカク。こまきも御シマツ代シマツのかくカクめあく。そ次ハやく厚シマツ。
こまきハ源氏タケシマの終シマツのふがまし。ばくくよ漏ルる。うまくまく、ハ葵アメニと匂シマツと
の侍ヒラシマ。林川シマツと竹林シマツ、梅シマツとお梅シマツとお梅シマツとくわ
くわクワ。このこまきもくうて年立タチかあづカツ。橘シマツとよくとくは橘シマツ。
とくは橘シマツと、ハ葵アメニの歎シマツをわくして一つまくまくされまく。また源氏タケシマの紀年トシタチ

を嘗代のうちあがへうふがくともあをもくれども、ひよみるよも御
福と大うふがく代へはおもひふよかて、源氏、萬のうへに盛衰のう。
をうたうちあがむかのよひつゝ、ちくまきうをもあきまで、ハねいと
ゑく、ちくらうわどて、がくへんはあひあうたをもあくふとくわ
て、じくくはくあひあくあくあく、さく菴、をよりハ御代うきゆく。
弘徽殿、ごくれゆけ勢ひつゝあくくや、くもくあくくをくあく
やうをあくちくふや、さくからくとて、や本とくく、みくへかくまきす
をあくくみくくのせすと、つたとて、や後を一年かまく
かのあぐー。片間、まきせきの二事あらど、かれはま掲ふもくや、隣も
とのあくとくがくる。じくある井のまくまくばざとて、本立よあぐくす
みハうづきくと、旅舎まくう冷氣代のまくほせとくうて、源氏君の事
いはくひやくくのぼくゆたよくがくみのまくとて、づひよ者、あがくふ
いはくて、太上天皇、よ准へきかくはすきがくかくせすひ。六條院へ行幸
のうあく、これぞ此天子のまくらめきくとすつゝとす、あくく、さく菴、
さくふくくと、け位ゆげうづくとくとくすすり朱雀院のけすれはせとくう
とくよ。女三のけ本おこりし、六條院のうへよ。よつてぬくせ出まつる
ちくあく、そきつよの二ニカク、柳本、馬のす。女三のけ本、うきかのうと
をりあく、あくと。柳のねれやうざれよ。六條院のけいとつて、あく、成
うけよと。キヅハ、よくぬ方けよと。さて、侍法をよせりて、せうせすふ。是
生氣のやあがむとて、まだうーのまくへ、せひ歌をのりのけくとあくすれく。
きて、やく虎とくかくきくとくれば、みぶち、天の盛衰哀樂のうへより。
御代のうへをとて、やくじらあらすよ。年次を省見て、こくちかくとく
ねとくゆきだくとくかんせ、物語の一般の大綱をぞひくよくて、取引年月の

種やく本を立リれうる法ハとくみやうむ。わがモウカのひづこもやあんされど大さハアシテキモせや。

系図の半

物ね徳アシテくらへる人の系譜ハシメするも用あふことなれバ。一ゆううかほ
おべ。これもすれまみ委ハシメしたよめづて。今ハ省ハシメ。こじかのまハシメ
も。皇胤・大臣族・卿大夫族・系図あたんひとのよにつまむて類ハシメして。され
りうへとよハあくひども。物徳アシテむ方ハシメでいそ。これよ相主客正副アシテの
法ハシメをうそせたて。あうせざればうまく事ハシメもれやきうり。ましく
を。まへやうたむらむとくに。されハ半ハシメ一級ハシメの主ハシメと立リるハ先源氏ハシメあると
論ハシメ。これよ對ハシメはがくやく友意ハシメあると。そがく半ハシメたくもくと。
そのあゆうり小姓女姓ハシメのばくハシメをやうり出ハシメてくくると。さきバ源氏男ハシメと等ハシメ
とハ。お庭ハシメの主ハシメある人あり。さて源氏男ハシメ相ハシメてハ。致仕太政大臣ハシメ。あう。

又始ハシメきよ対ハシメへうる。二條太政大臣弘徽殿、宮宿の一族あり。こゑすと
ちのとくら。源氏男ハシメの族ハシメとハ。ちゆによくぬきゆうて。彼此相ハシメへ
く。がね居ハシメのおりハシメたなきバ。客の法ハシメ。あも朱雀院と冷泉院ハシメとも。
やあれ戚ハシメのひくうふづうて。事をうちハシメ。これだんぢ物徳アシテの大略ハシメ
趣ハシメの立ハシメあらう。さて、次ハ六條、御息所ハシメの族ハシメ。群馬太政ハシメ一族。
さてハ明石入道の族ハシメとある。あれほどあれほど重ハシメて重ハシメてある。まづ
よハあくべ。それおもく。併ハシメのひととある事ハシメとすけ小差出ハシメある。あ
丈よりよびきみりあくべ。松生ハシメおのく。そめのようきく。よ。法ハシメあくと
なまごば。そよよとあべう。そのまくハシメ小洋ハシメをうるべ。さくまく
宇治のまくハシメ小いづり。そと。萬大將ハシメとまとく。匂ハシメをあひ副ハシメ。是
六條院ハシメ致仕大臣ハシメを相副ハシメ。こまきハ六條院ハシメのゆまと。がくゆま
のゆまとをお費ハシメて立ちまわのぶて。大さに因ハシメやくと並ハシメておあくべ。

書かれてゐるが、それで、さうして、ハ、まの状況をその客として、
かのまゝへ、かれらをもつたままで、さあ、この法どもあると、
こまゝに、小説の詳しき事ば、さう、ひだりの大むきをいふやうにされば、
系図を立てんよハ、かくまとよへが、おとづれるが、これハ、お便を讀
べたまれば、系図あると、原書小説での用語と、がやうの類どもと
見えぬまゝ、だらかに、おとづれやくな。

此、お伝小説の法則ある事

このお傳代めでて、おとづれを、へうおふじもせんハ、とさびるや
なまごと、あへて、立て、おとづれのいふまきをねハ。
せう一やうふ、かれらのねよハ、あへて、やうを記して、しらぞ、あう。
くきの法則を、お構えがきるかのとお、一々、ばくそとの
法則といふ、我國のあすよハ、じきが、立て、くやしくおもなされば、何事れ
ゆの法則といふやうもなかれど、かくのまき、文章の法則
を、いと、やうふ、たゞ、おとづれと、おとづれを、あふわき、ばくそ
の法則、おとづれの法則、おとづれの文法と、さう
も、これづれは、いと、ほせよ。盛ぶ、いひ出、おとづれ、ばくそ、よきと、そ
むき、誰も、うけあひ、おとづれ、おとづれ、おとづれの文法も、考
え、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、
と、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、
ひきまで、かく、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、
じかのあくによつて、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、
おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、
おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、

をひすねてやうやくあるよかとば。おのづこはのうつるまへにみど
あへば。さへばさるよつまへり。司馬遷が史記の法あり。おどりくも。みど
ぐつたり所あらきともりだうねるや。さればとて彼と此と。語のそあり
本のそも。いづれかうりあるよかとば。あひだらよ彼小なひ。いづれか
りよべり。かくしても於ひよぶある皇國の学者ども。例の海カヲ小似シニ
とりふきいづけひく。おのまを那人とするものあり。そへあひ一ことう
の論としだ。そもく皇國言あづの文としづかのハ。祝詞宣命を記
ておれハ。古のせよあるとなく。おまを記せよハ。すべて漢文章をう
そかうつる。誰もよく知るがどく。和まふこのねほとしおかまで
よりハ。宣言もあづれ文章も。がくくもくわくとあくつ。さへゆきどせ
物語よりあつうのみね。とぞふかのおりがくとく。聞とつてゆくのみ
少く。いまざかへ文章としづびたやどれかのとあぬを。おれをとぞきく

なん始をそてかくめで。いづれに文章ハをよあんまつて。まるハまづ
文章としづくと。いもやあやとばつて。やに一きてやくまと。文小きう
そ。後も人ぬめで。やもくすくすくむじよ。たゞだいぶ捨うちうか
ごとく出づる。成りよハあくと。文ハあや。又がく。たゞとよむき。章ハあき
うふあやうる。さの字モジをよどがれをきくと。きよあくするかとばえし。
我皇園ミツニす。それとすきうと。じれをつけてりかくは。うづりうれど。
かの祝詞あくと。儀をうどりうれど。勢ひあで。かきくと。それば。終
く。およおひがく。うねじにねよへあへ。うづりく。し。おも。ば何事と
がく。うねじよへとて。おも。うづりくと。きつて。うねじにて。ハ。何の
そへにあもあへて。文章となくんやうへ。べ。文章としづかの
そへに。うねじを。おも。うれど。もうも。バ。おも。うねじの文まも。かの史記がく

やうやくなまうといもんとひづるとあらんとまじはうべる人のよ
よいでおりゆくおれなまんとおもへだのづく其法のうたすがにわの
よもあへば。そもそも彼と此と、半のほねがゆすかのいひざるも。い
くからむる半のあまば。あくひきれづくうへがんとくも。まくと
似づくもへあるまどにあまほ。彼ふたりへりといもんがまくいといづに
むがへく。まごこの吉園云なぐれ文まといづれをねら。物語をせり
る始ある。といもんがまもあへばとハ誰ういもん。よくやみがまハとまれ
かくまれ。今がお後の文章サタを評して。そのうでてうたよ。法あるまへ出つ。
文なまくあまきうたともせんとするハ。おのづく法の名をうく。さ
めでてくとせんとせんと。何をよくまでうまとせんと。さくもく
やまの名をも。ゞちふ考くさんも。いとくへやまにまつハあまごど。かれ
漢文章の法則とりひと既ふくも傳もうれば。云をかへりひづると。

達うは彼よなくるねかへばとひもん。さきバツづくことさくもづ
ひく。たうりよ絶らへくせんよすハとかのひく。其後せの文法を
よいつれ。別よあへがうきの名目あくも。がくそば傍て評する。うん人
さるきてくよ咎め。そのうへこまくとあひまどと。めでてうひつむ
牛ふもうへば。安藤為章が紫家七論よりやくを寫とえいでりへぢ。
上畧全篇ハ富貴温潤の氣氛ありて。古家の文章あるじ。中少山林出
世あり。市井田家。うち。吉園哀傷あり。閨情風景ハ専じよよくて。情を
うつし景がくどる。半のうつすも人よあへひ。モテ遊ぶがどし。
全体ハ傳すにて。又ゆのづく序の伴う。跋あり。記う論あり。書あり
て。諸体あるをき。彼も本れふ。はふ奇妙あるとのたうて。為章
書く其章段をあくさん代うる。序して云。論破あり。論義あり。論腹
あり。論尾う。麗よ。細より。俗より雅小やむじた。繁より簡よ。歸。波瀬。

頓挫・照應・伏案などといふからこれら文法のづゝ備也。す氣派ハ悠揚
とて寛裕ふ。文勢ハ圓活とて婉曲なり。是ふ空のまゝだ。一説は史記莊
韓柳歐蘓よりいふべし。女の筆ふらむめぐれにあやしく。或は誠よ
古今獨歩の才といふべし。よほへようり聲情といひあつても、清少
納も才氣狭少よしてさうじむきる証あつてふくまげむわにもの
なり。因由も海にべうべど。已上^{正室}云々。とて、又恩怨篇の新穎熟考ふ
も。これふうひく文法を称んとおもれんと見てや教を若ゆき
くふよ云。文義よ。まかあん半のうを前よ見る。それを生張かと
も伏案ともりべし。此二事が一の違ハあらず。大抵^{トウ}回^ドタキバ互ふち
き。又文後文相對へて効くと照應といふ。又伝を即時よことじと
頓挫といふ。又文はある人相對して互よ対象をうけよ化者おもひう
を評せる類をば。記者の語といふ。俗小茅ふたと又無對をど。往々詞もと

ふぐれた所すハ。或ハ源氏。或ハ筆上など讀せり。又文の句絶よハ備不点し。
讀^{トウ}ふハ中少点せり。後^{トク}小^{トク}語^{トク}小段をバ『如其も^{トク}。大段をバ』^{トク}め此記す。
大段と小段の小別^{トク}。小段をバ『如其も^{トク}。大段をバ』^{トク}め此記す。
車の終^{トク}へとれへりがまよ例ある半もある。どんとむよし料のそ
なう。その外右は教條のかみも注法あれども。本文を説くるはめてかく
えきば。大うき代著すが。ねくはきの運^{トク}小^{トク}美^{トク}多^{トク}多^{トク}。よくもと
ほくくらむべ。先入の意を主とて。不きよくとぞへもうべされども。
熱くこくこく^{トク}ばやすきて古きよつたす。誤まるとハ程及むべ。とて
もてるなどふたり。又小^{トク}極^{トク}も。こまやうれふがく深く穿孔^{トク}。作^{トク}
ぬの心を用ひて。よくとぞ。あらうとぞ。とてさあくあくもとれかある半^{トク}ありく。
や法則^{トク}の嚴^{トク}うあるに極^{トク}も。どうたまう。圓滑^{トク}翁の立^{トク}ある半^{トク}ありく。
よだが一半^{トク}りく。さてこの評歎をバの一つもすうきてその法

則のやうへいふかといひんよ。まづ一部よもよつて一部の法則あり。一毫ごと
小一卷の法則あり。一段ごと小一段の法則あり。一章ごと小法則あり。一句ごと
小法則あり。あるまじまじまでおやへたままできりひる法則あ
り。その一部よもよつて法則とりへ。時世年月の移ると經と。人事のゆ
きりゆきり依緯と。お緯の趣を作らむ。時世年月の移りゆ
經のうへよそへ。上條小もろびづく。まづ相貴。すれ大法代を改
よ朱雀院の帝代。改次小冷泉院の帝代。改今上とぞ。す
帝の法代と宣承おきて。ち中間小必。御後のお尼空^{ナガラ}。年をおくれる。
こき法則なり。又源氏君の齡をちひく。まきつゝようねうよとみ十
年齢の半を。五十四帖ふもつゝね。おの法代と小おうへ。法代のもの
おもがたよよりて。お君のうへ。盛衰のうへ。をうだられる。これ法
則たり。かくておきふ隨^{ナカニ}ひく。あく。人のうへをも年をおひて。たゞ

相あふべ。齡のわざはちからせる。是亦法があり。字法のやうへ。ま
ま字の數をみて年をもひく。匂ふを悉くする。これまた法則なり。
かく字あひをと。さて人せのやうへ。りどく。事じものを。緯スヰ小あやどり
て傍りやくふほけく。あく。法則あり。そく上條めもく。まづ。先^{シカツ}光
源氏君とりふとく。一卷の主と。おきふ對へく。がやく。因^{シカツ}。中^{シカツ}。をえ
出る。こまく。先^{シカツ}と赫^{カギシ}と体對へる。正對の法なり。おきふもおきふ。えのく。ハ
かく。うへすあるがふ。モ所縁よほ女強の生^{ヨウリ}上をとく。出る。こまく。女^{シカツ}の花^{シカツ}也
うく。ふはととく。いとく。おきふ。宮地がさうのびとたのなま。ば。始^{シカツ}源
氏君よ相偶^{シカツ}ひく。すべてこのほ。上へ。こまく。奇對とりづく。かく。かく。は
しきふ光と赫とおじく。まづ。よより。ハ。一まく。ふあく。からて。かけて。も及ぬ
結^{シカツ}撃^{カツ}かく。とりづく。さて。その光をあはせす。余を傷ふ。苦^{シカツ}大^{シカツ}ぬと匂
兵^{シカツ}。えと底なし。おきふ。おのたゞかり。小匂^{シカツ}と苦^{シカツ}とばさり。出る。

正副の對法よりて足源氏のわらわげをうつしる照應なり。又源氏君は相副て役仕大臣をあつて、やまとどもを助けあやざつる。これも正副の對法なり。また二條、大内弘徽殿、宣后御坐とゆふも。源氏君のゆ族とは中のよろこぬまゆうゆうて、お宿の種子とくも。是いもゆる主客反對法なり。又上ハ何事もめでとくきくひてお宿の中代女の主余とある人ある。又反よ末搞花ウラとむづへるこまとも反對の法としてスルもあくまつる人を差して坐と紅クレとむづへるこまとも反對の法としてスルものうへをゆう出そとある。まくふよつて一やうなづば。さあぐくまくへて出ゆれゆるかよ六條、由息町のゆうとくまつるハいりくめづらなり。タ教タキや小六條、ゆうのゆちのびうきのはといひ知く。とくふかよひきる。まく。又変化のゆきよよくへてあくまつるまゆかどもまくがくいよいよ。波くもゆく人をだあくねだ。ちるうかまちるう葵、春よひくつてもくじめてお坊

おほれ息所あくまつて伏線をゆる。あどハ、いとおひひの計はすつらゆく。とくゆうでにじこまくはゆる伏線の法は奇イミじにゆのく。又朝日の筆も。帝本ヒメノ御方と女房メイボウとも源氏君のゆくを許せる。後はくらに。まくせねまく。さて次く小顛コトブキがまく。これも反アゲ法かく。一人も侍むすめれ袖アシカ小そひく伊勢イセへづく。一人ハサグサグ。蟹カニの御院ミヤケよ立タチ。かく。伊勢イセと蟹カニとお對へる。件の伏線を引かれてゆく。とあられ。さて又葵アマリを小蟹カニの車カニよひ。ひれヒレ下シテて。かく。源氏君のゆく見所ミズコをうとすまくを恨ハナシて。つひよ伊勢イセへづく。かく。伊勢イセと蟹カニと葵アマリと柿カキと對へてゆく。さておのまぎれのくづく。いもくかく。またかく。とまくをもがく。ハ、伏線め。れんあくひ。うづく。又ゆく。上條アマガタふりがく。おふくろふよつて。源氏君は太上

天皇小准アマミタツシヒテ。よみたる事アマミタツシヒテをきらめきはよがまつる。や報應アマミタツシヒテをかんじて。女アマミタツシヒテのねむすめをとくやる。こゝアマミタツシヒテ照對アマミタツシヒテの法アマミタツシヒテ。おのづく教アマミタツシヒテを示す。のアマミタツシヒテ。小表房アマミタツシヒテの傍アマミタツシヒテが冷泉院アマミタツシヒテ小わアマミタツシヒテあり。さう。每アマミタツシヒテのゆかアマミタツシヒテがまもアマミタツシヒテあへり。こゝアマミタツシヒテおのづくアマミタツシヒテ也アマミタツシヒテ。御アマミタツシヒテある。ハ。こゝアマミタツシヒテとその照對アマミタツシヒテある。とくに。いふうにゆかアマミタツシヒテおも。ハ。この年アマミタツシヒテはあらひ。ありてほひよ。せあり。ちまく。底アマミタツシヒテがく。ハタアマミタツシヒテも。もへそアマミタツシヒテと。ひ。波仕アマミタツシヒテ大戸アマミタツシヒテの後アマミタツシヒテハ。お捕アマミタツシヒテを大戸アマミタツシヒテの方アマミタツシヒテ定アマミタツシヒテするがども。ばる。一の報應アマミタツシヒテのなまづきを示せる。なまづき。又タ船アマミタツシヒテもばら。身アマミタツシヒテよひする。小浮舟アマミタツシヒテ。身アマミタツシヒテよひする。思對アマミタツシヒテの法アマミタツシヒテ。なまづきの院アマミタツシヒテと。う。法アマミタツシヒテと。ゆ。御アマミタツシヒテ。もと。頭アマミタツシヒテ中持アマミタツシヒテと二つ。あら。小。苦アマミタツシヒテもと。匂アマミタツシヒテと。匂アマミタツシヒテと。化アマミタツシヒテ。を對アマミタツシヒテ。み條アマミタツシヒテのち。れ。八月アマミタツシヒテナ。おと。三條アマミタツシヒテの室アマミタツシヒテ九月アマミタツシヒテ十。二。教アマミタツシヒテと。対アマミタツシヒテ。サツ。馬車アマミタツシヒテ。小。の。を。出。き。の。ま。あ。か。ま。づ。る。も。ふ。一。照對アマミタツシヒテを。あ。せ。る。も。そ。一。人。ハ。づ。る。ど。も。

さくらふ。どう。教アマミタツシヒテ。一人。ハ。こ。ま。ふ。う。す。た。と。れ。る。か。ど。も。す。ぐ。て。因アマミタツシヒテ。手アマミタツシヒテづ。う。あ。ら。申。ふ。ま。と。る。ん。あ。だ。女。か。よ。う。ま。と。ん。教アマミタツシヒテを。や。う。と。せ。る。さ。そ。タ。教アマミタツシヒテの。なまづ。き。ひ。う。づ。く。ふ。う。づ。く。し。教アマミタツシヒテ。母アマミタツシヒテと。對アマミタツシヒテ。法アマミタツシヒテ。あり。く。鬼アマミタツシヒテ。と。寺アマミタツシヒテ。傳アマミタツシヒテ。と。东。西。よ。對アマミタツシヒテ。大。夫。監。と。左。膳。竹。と。の。む。づ。く。あ。び。る。と。む。く。長。谷。寺。と。小。姓。の。房。と。も。く。う。と。ア。キ。ア。ム。ア。ヒ。カ。と。さ。く。又。須。磨。の。う。づ。ひ。源。氏。君。の。ち。づ。れ。喜。へ。を。か。ん。み。あ。る。を。そ。や。く。若。年。か。不。ぞ。場。を。あ。づ。く。て。山。そ。良。清。小。嶽。上。の。す。を。か。づ。く。せ。う。く。こ。れ。の。伏。案。よ。で。ち。く。須。磨。形。の。ま。と。か。づ。く。結。構。の。法。く。こ。も。と。ば。見。て。も。か。の。石。山。さ。か。て。須。磨。形。の。ま。と。か。づ。く。が。ど。り。よ。需。磨。の。妻。な。る。を。知。べ。し。又。花。宴。寺。と。相。應。寺。の。佛。代。お。だ。り。て。佛。氏。君。の。老。死。さ。う。の。ま。う。す。を。あ。づ。く。る。小。様。よ。匂。の。貌。月。り。て。匂。は。れ。く。の。あ。れ。ま。ざ。れ。を。あ。づ。く。お。き。と。さ。そ。や。ま。の。つ。の。り。く。く。づ。い。よ。須。磨。よ。さ。す。く。ま。く。ま。は。る。

入きじりへそうて、じうだが、づたをまつ。こもとうじゆはおへくすかみをす。秋の月ふよせとあれまふ。第二年の八月なるを。初て、年商一〇よそとされしるハ春の花よりぞれぞれある。穂は、秋の月ふとけむとて、すまふて、盛裏の周縁を、日元ふとくへて、ちとせくる。これいもす、首尾相應する法。なべや外かも、浦内はの年老て、ちとせくる。近江、伊賀の志とどふとしめうたをもくへ。博士は女のかきえびつらふ。大學の儒者のかられきを思へる。いとどけるこまうなる。うどもと、いづまとも、かまくらの伴。新いへまふだ。こまよハ只その大、あくとひととひとりあひう。うて、中が中ふもひみド。れんに隠すと、まきてあがく。さて、復と異うれる。おののこ、いとくめでく。いとくめづく。きづく。て、やまとかく。古今ふこく。いとくめでく。いとくめづく。きづく。古今ふこく。て、がる。きづく。ひのいとくめづく。まハ他ふ又あくと野。こまき。省筆法のいとく

きのふて、がくもぐもせく。かくとまくぐの道、もふ。うもかに
佛說あど底引いで、もあぐ用あに半をばくまされど、このを度の
さくび見よと解き、うねのあらも、いとくちもくあくねすか。す
まくとくのほくみの見ゆをつすりて、うねはうなどいひへんも。
いとく大海オホウタの一滴キヅ。ふはく。のむをじくらぬものふて、いとく
あらむあくらむ。うり。折せぬ後ハ、相重シカツすよ立衣のうせゆる
を、革のいくく然むまくようす。起され、ふ。楊貴妃のこめーとひき
りぐ。きづく。まくもぐれつて、ふくも。こすれあらう。ばそくとされ
て、くとよみすひ。半を載シセく。とくふ。源氏、君のやうもとせ
りて、きづく。ほくよ。佛法をふりうて、はよのうせす。こまき。お唐比
主とある人のまづ一人うるまくそ。やうて、光宗氏のまくらをひき
下づあへて、きて、幻美ヨウミといづうて、三月より十一月まで、がのせ。花はまくら

かてりよくながれたりまよへをぞうらの月花木本手ふよとへてま
はくまれる趣いもくわのれりく。次法縫手のあよ。源氏もも
やうそかきほんぶんやうかれ。そゆよ。やうとどる厚紙ひで。たす
をうそすがう一巻ふぶく。ねきすせゆへとびよ。とりかみとよこ
きくまと。やうてきのわよおきる。相手のまきはづかの小僧くわ。よへや
紫織はあくべとおきがくならぬて。源氏ももくき紙よ町をかく
また絃縷とせんぐる。うらあくとねばゆ。がの初のあふ。ねじかくす
ぐる月日とあくねすふ。年もむだをもくすやつたね。とりふす。紙よ
くるよへらす。源氏もも辞せめにくるうすて。やうてちがくれすよだを
示してくるのこどとせん。まかゆよ。そぞくられ年風とくわちたて。匂え
きの旅小考うきまひす。後きとすく。そのはすの手どわと
つらでくわる。まくらひ。じそんう。歌くわねくとて。おふりくうわと

おひ及ばずキレもなう。すくをすあくゆ。伴ぬ候ども。やまとも
ほうをひそび。ひまむかし。まむかとまとくる人のうをば。がだうもあに
事も底極あくまく済ふへて終ぬハナ。うきとどもそくふいりても。
詩文小作する。詠げどもとかくて。いとひづかくやうづひも。歌院
ハ。既小考あくとまふくの筆のまんみをす。まくとて。よる。若菜をすりも
報應のまくともをうたがふよ。もとみをの終をまく。省うれるうす。
いとくと仰。筆めにうるとれ。実よす。本ねどねじかて。ひも
らぬまひあす。よしと高説すも。いとまう。うに。のからきまくまくとお
せんよ。よしもかこふも。圓。やうある歌をれきを。おあくとじれを
半身をくべ。さてハ向。まくらのまく。いとひづかく。うぶに。それまくば省
きて。うりく。小行。一帖よ。先まの。は歌を。まく。うぶ。いともくへめで
した文章の法といふ。さんくとくとみて。後味へざれかのど。とて次か

爰深樹、^{シテ}をまよひて。まきとゞあくわる。いひもじめにしむるハ先
この字ははまくハ、皆小まきと匂ふとの傳、をうるまよい出をもて。まく
拂拂^{スル}てより。ハ、あの拂葉^{スル}の由本、はまゆくわくうた。こまくよつよつ
済氏^モのるをかくづくするをとハ、そのをあいづまくとぞ。いともも
やうれあるをかくづく。人情のさうづくが、まくの半どもを。いとくそちに
まくゆくれるかのふく。ハ、そのをふみびて、うなへに拂うひ。まくうだ
つ方^{カタ}をまひ。拂^{スル}をうれみす。ごとたうづくを。おづくとて、まくゆく
づくひより起りく。佛のまよは志^シかくあり。おこあひたのどきをせまふ
さは。又、菩提^モの極本^モの半とほのゆあうて。身をあぢたあくらひ
なうきくまつづひ。佛のまくふくをあくからうて。おまづびふとて、う
治へねくらむまよ。又、大悲^モの中^モを。ひうでをよあ。せあくとて
お身^モとすくいゆきあくまど。いとくあくまくして。おまづく
ゆをもあきぬわう。さてかくとゞあくふおもあくする佛^モのまよ。
つひよ葉^モの大悲^モふけくまくひ。と。草^モよくのぎき^{スル}と。中^モふ
あもせあくまくひ。成^{スル}。行^はむ^{スル}かかくして。匂ふをひきあひく中^モ、中^モあ
せあくまく。大悲^モかかくまくひ。又、中^モよらひうけふく。
どうくよまくへむぼくまくひ。中^モのそれを遺^{スル}とて。浮舟^モ
をかくづくとす。あくまく。匂ふ半^モでむ。うれよ^ス菩提^モ
の浮舟^モをうなへす。あくまくひ。匂ふ半^モであく。ひくづくまくひ。
わくづく。ほひよハあくまく。浮舟^モの所^モをなげんとぞ。まくひ。
いづきも。ちづくとあそれのうだもと。こやくうあくみもめんやうある
ハ。がの深え^{スル}。たやうてあだむく。うか一望^{スカウト}。こよれ^{スカウト}体^モうく
きく。ゆふく。今^モハめづくとあるまくひ。こく匂ふをみ。浮舟^モ
うちもあく。一^ムかだりへかたか。こくよひすかくおがくの旅^モ

まきあふる事あらうと見ゆる。はいと見ゆる。浮舟、おふりとては。
 いとあうだすじゆくをむかへ。ひしのぎのうみのまつたとひがべ。たゞに浮民、私
 の舟を上る。あれどちかくて。よしむさへをあらぐ。又と人の
 なまけをもじひき。わのあそれあつて。むしむ家をあるゆふうにな
 ざすする。此地のむひとの人に。おゆび。おゆびをうる法
 なかあよまきんは浮氏をみぢやかして。ああやうにあひし海上にゆきとふ
 ウ紀あ。匂ふハ涼き風すゆきわへ。おゆびをくわへや
 みからくわへて。おゆびとひくとひくとひくとひくとひくと
 あうらうらむらむ。かわぐのやうと。かよひて。まくせんやくがれる
 ばじもくめぐれて。めぐれとほんも壁うあり。まくせんの尼よ
 うりて。小船よかくせんとくとく。またもやうひく。事儀、せぐみの小
 犬を。まくせんとくとく。おゆびはまくせんとくとく。まくせんと
 うりて。ゆきとくとく。かくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくせバ。小君のむすへくからまくよるよ。まくのを。くつか
 まくのうふて。すぐて一般を。おととぞくらむる。ハ鬼作もむくらむ
 た。まくづいとひがべ。かまくとぞく。おはな。とほくはまく。まく
 がく。のくわくわく。えくわくへへして。だきむらむ。いきむらむ。あく
 こくかくして。條情のまくすりあきよ。あれ。おはな。まくとりのすり。うて
 そくらむる。まくわくわく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく
 た。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。
 小筆を省く。法ハ。筆を。いそく。省く。が。お。は。省く。ご。い。そ。く。文
 章。も。と。省く。こ。か。れ。文。ハ。筆。す。委。く。く。く。く。か。の。下。て。
 俗。小。り。か。あ。れ。で。手。も。と。じ。か。かる。体。な。き。バ。お。々。よ。ハ。い。と。も。く。し。
 ク。ゆ。や。う。な。る。ね。く。え。か。ま。く。よ。う。た。こ。も。く。く。手。筆。を。省。う。き。く。る。所
 な。く。ふ。い。と。き。ハ。く。く。が。ま。でも。お。ひ。よ。ね。す。ま。ず。下。て。が。處。を。と。そ。浮。橋。

まの本をあらへ。シテハリヒトアラムが如く人の文かも。ハシマカ
コト無くなんわうる。ハシマカハヤウリハガヘトアシマハシマのまき。
かくふはまかきりてハ行のまくまくゆ一もあらねど既に森ホサキの太
上天宮のすぶ先君の業へをせんせん。おきて。さくやを處をあす
るうなまバ。其君の本ハモテヨ。然がくの御はふ。宇治をとつた
くじく。かの御まほみどもをいひつゝあるもとあまバ。かくもかくふ
じへあた半ナツテ。其辯情のうだうなれど。またといふんやうと
ナ。さくえを浮橋と名づけむ。小舟ふりまく。まく
船の後よちるもす。みみ漫でとくのきをふくめて。とくびくふく
とくべく。成だらば。源氏君の絶をかくする。幻をよ對ハカへ。着幻を
うけ合ひ。法をとくせしむれとおがく。がくもくもくもくめで
まく。さて此の法と。めぐれしたうだ。まのまのまくよがいあでの人れ

おめひもうまやみ本みつあり。モニツハすぐぶりう。や虎ととく。浮橋
矣哉。まとのゆく。今ニツハくみゆ名をほげど。こと多くるく
のゆき。ほゆれぞ。かくがんとくれると。六條。御息所の本を伏せりん
とく。既ふくらひすへるより。伏せり。あぐく。控進ともいそびと。あまの
坐スルとく。あくらびへり。出まきへると。葛ぞうの坐スルとく。木枕。坐スルの間
小室を省うきる所とく。この名をつくれざり。六條。御息所のす
とく。上條。伏せり。もいとま。伏せり。真本。控。その初。いとく。めぐらし。
そも先。五づ。も美のまよりして。お焉。君。よん。とく。けり。人。いとく。お
く。ゆに。當。共。教。て。ま。とく。く。伏せり。伏せり。う。ひ。き。う。じ。す。も。か。ま
を。ば。う。く。く。く。伏せり。い。ほ。く。ゆ。よ。う。た。な。一。あ。つ。て。さて。藤袴。の。ま。ふ。玉
う。の。裏。内。ほ。の。う。す。な。り。て。ほ。う。り。り。あ。入。内。ま。ん。ま。と。ま。て。
あ。う。こ。よ。う。ゆ。み。ど。も。の。み。く。ま。か。が。き。経。宮。だ。う。ふ。ハ。う。へ。

ありしをいひ。とくもあらむ。ち本極意のゆハ。いとくさひをす
あふうりて。けく人のゆよ。よおひくまくもあらむ。蟹も
大ねの既よみき。そばにゆくをうにゆる。ねまつ。とくで。
内小きくめさんすもか。く。くよあすゆか。く。とくあみきえ
ちく。く。く。もつみあへび。どうにちじめ。とくあめきえ
くすく。めぐくにらひのかく。もだめハ何うともあきぬを。やうく
よみかく。やくまふ。かねむれに。まくくる。おおごくまく。ふ。奇し
く。めく。とあく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。く。
く。めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。く。
く。めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。
めく。し。まく。あく。あく。の。ゆ。く。も。まく。やく。く。く。く。く。

おひく。おひく。女の。まく。虎おやう。も。まく。おふれ。も。まく。おひく。
おひく。ひあり。と。の。虎。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。
おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。おひく。

をちくの。う。をうける。所。の。本。

此物語のうちふ。春夏秋冬を。をうへのうちだをからふ。ひととよふえん
ふうやびる詞をうへて。いじりうだめで。うめす。ハ。誰もよく知らぬふ
て。半がうした草ハ。こきをのい頻キリホメ小當く。名文ありなどいひの。一そく。
御手ても。このうちだをかまつる所ハ。ああぐらふをのうべくする詞を
の。むけとてかまつるふ。あいだ。みふや財くわたあいへくもんの
ふよあくせて。半がうれある風をゆく。ちんくをあくす。帰本參よ。お月夜
のあけと。かくと。あぬ成すする。ふよ。例いあだやのきくも。うだなるへく。
えんやもすゞ。もんやうやうううとある。きをねひらめて。あくす。
あやか。もこれれある。お。小振。も。川出。いそれ。うそ。うそ。うそ。
うる。の。仰。めの。ああ。うだ。うち。持。文。よ。ハ。い。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。事。を。き。く。き。ぬ。些。文。の。例。く。他。ふ。も。さ。る。數。ひ。ね。や。
あと。バ。今。世。小。芝。居。と。り。と。す。ば。う。ふ。や。も。う。う。れ。そ。木。か。ど。と。化

う。う。う。う。う。う。う。う。う。所。の。う。あ。と。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。
う。
う。
う。
う。

文章とぞりやなる。それが字びのよみをとて。ける。うづうじともをうちまつて。こゝふをとなく。書かどもうて。もぐく。もるゆをとて。そもす
ならあめ。書ひぬ。ハ。ミツリ。ハ。あく。れど。ちきの。我
皇國の文章とぞひいそんハ。が牛の毛。一。さう。いふ。
そ。らむ。ある。すな。おのき。やく。歌を。と。も。ひまう
か。うば。い。で。さ。ま。あ。び。の。や。か。よ。か。文。ど。も。あ。そ。て。も。法。を。示。さ
む。と。も。ひ。く。つ。と。も。や。う。も。と。よ。み。法。へ。う。と。お。法。を。お。きて。の。か。
こ。ま。く。の。法。は。あ。ひ。う。あ。ひ。く。文。章。の。や。ん。と。な。ぐ。べ。た。わ。の。を。も。く。な。う。が。き
お。ひ。こ。う。じ。ほ。ひ。よ。せ。ま。れ。ち。う。か。く。を。も。お。ひ。く。ち。う。お。き。バ。文。学。を
お。り。か。人。ハ。ま。ま。ふ。小。説。を。と。と。あ。て。か。く。が。き。こ。そ。も。う。が。中。よ。く。
み。ド。う。に。ま。ま。く。よ。や。ひ。き。が。く。鶴。の。そ。だ。を。と。か。亮。の。脚。を。そ。く。く。ぐ
じ。と。た。り。の。ご。と。あ。ひ。も。あ。そ。く。と。じ。く。く。う。か。の。き。う。た。と。た。ま。く。ふ。ぐ。

あ。べ。う。ん。う。こ。ま。く。も。い。と。ま。く。る。こ。よ。ハ。あ。そ。と。そ。く。う。の。往
歎。ど。も。少。や。く。う。あ。れ。う。あ。く。な。く。と。お。ど。う。う。れ。く。し。細。流。お。か。ど。よ。
か。の。相。互。ま。よ。タ。月。の。を。う。し。か。ど。と。り。く。月。ハ。入。う。の。や。と。り。く。月。も
ひ。ぬ。と。り。く。う。う。よ。そ。の。首。尾。な。く。く。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
く。う。
脉。を。ば。う。ひ。の。う。
か。く。よ。詳。ざ。る。を。ひ。く。か。く。ざ。ー。さ。う。じ。う。が。く。く。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
細。流。ハ。流。お。よ。か。く。う。

張書評釋丘例

さむぐの抄どもの説を舉る。舊注新注をひき、いかがく方か
圓き圈の中の小評を記す。評ハ本文のひきどり所くを批評し
あら。本本文の通じてをかりてやくとなり。かしこの注をも
評歎と名づけ。

一先達の説を用ひて書目の標をこねる。いふをそらべ

源氏奥入

追注奥入追注加

宮内少輔藤原伊行朝臣作

京極中納言定家卿補注

河内守源光行朝臣

紫雲寺素寂法師

水水原抄

紫紫明抄

最源中最秘抄

同作

河海抄

花鳥餘情

秘源語秘訣

和和秘抄

不不審抄出

祇弔木別注

宗祇法師

同作

弄哢花抄

葉一葉抄

細細流抄

明星抄

孟孟津抄

岷岷江入楚

牡丹花肖柏記聞西三條実隆公說

西三條右大臣公條公

西三條内大臣實澄公

九條禪閣植通公

中院中納言通勝卿

箇 岷江入楚中一說

西三條實澄公說通勝卿記聞

巴紹巴抄

里村紹巴

因萬水一露

能登永閑

湖湖月抄

北村季吟

湖師湖月抄中一說

箕形女菴說

拾源注拾遺

季吟記聞

契沖法師

新源氏新釈

岡部真淵

國王小櫛

本居宣長

補玉小櫛補遺

鈴木朗

餘源注餘滴

石川雅望

雅言集覽

同作

雅譯雅語譯解

鈴木朗

已上新注

此外小なりさあぐの注釈あつといへども。若よりちむと用ゐる所のみり。又今余が凡ざらか筆づりへすべて等だ。右の中から。雅言集覽。雅語譯解。二つは。拙儀の注あつて。もとから拙儀の雅云を解つて。ねがまじ。ふくくそへつ。紫がよし。うす。ハ某書云。まよ。某名云。かど。おか。くわ。名をあつて記し。又をりく。或抄とく。引く。ねと。本居先生の書入。本とり。抄のやひ引き。うす。誰人の抄とも知りべ。か。小櫛。ふも。或抄とて。引く。まと。全く因すと。うす。さて右のおどもを引用あつて。小櫛注。大う。省まく。と。要と。うる。と。み。体解。じゆと。新注をとまく。その中もか。小櫛。ハ。は。小。多。一。も。も。お。上。よ。り。り。

一 喬注のうち。河海花をかぶ。既よひよまきて。うそとの弄花細流などよ

さかがく又もくらを。假月おなじく。後の方をおもむと奉ること。
玉小桜小雖じて。またの方をまづおぞれ。あつよいそれより。
まづよきと。御も。後ひそむる。おども。まさにおれよろき
半を。尼御も。おども。ありく。よだすも。多き。ば。今、あるがちよ
う。お後みくらへ。ごまのすぢれ。穏に。ゆき。を。引け。かと
よう。彼時同様。かく。またの方を。おも。まづ。おまづ。およりも。今
少一虫加へ。まづ。あと。おどり。又後れ妻。およ。も。これも
やむ。と。はねあひ。となり。

一
舊注。物。通。も。解。き。る。す。ぐ。が。小。と。ゆ。も。あ。ぐ。も。解。き。あ。の。い。ふ
で。や。お。び。も。て。や。お。び。も。と。き。く。き。く。あ。ぐ。う。回。お。か。れ。あ。ぐ。
も。角。ど。も。を。改。め。く。お。の。が。秋。の。下。よ。起。し。る。や。あ。く。あ。り。それ。ど。り。ぐ
ち。く。き。ぐ。ひ。く。ば。も。あ。と。バ。ー。と。き。く。び。こ。き。た。い。と。快。く。ぬ。こ。あ。れ。ど

とよかく。よ。ヰ文。の。き。通。を。や。き。く。ん。み。小。と。て。く。さ。き。と。ど。一。か。考。へ
滑。き。く。り。と。ア。キ。ア。キ。と。ハ。が。一。も。の。と。き。び。祭。釋。よ。祭。く。モ。舞。が。舞。の。と
ス。死。よ。と。辨。へ。り。り。

一
諸注よどまつて。説。の。り。づ。ま。す。回。と。き。あ。る。ハ。祠。み。と。く。と。き。の。通。を。安
き。強。と。う。つ。ま。ち。ハ。祠。事。小。力。の。す。下。小。也。死。ハ。役。あ。ー。と。く。

一
歌。の。長。く。く。既。す。小。袖。く。と。諸。抄。の。説。を。矣。へ。り。よ。ど。と
の。あ。る。條。と。餘。歌。と。号。け。く。別。小。り。く。ま。も。本。文。の。き。れ。ふ。け。よ
き。ら。え。が。く。所。と。お。祀。を。い。と。く。祓。除。ま。小。の。説。を。考。め。く。つ。ま。と
説。の。難。例。お。半。は。根。源。或。ハ。儀。式。調。度。の。故。実。が。ど。さ。て。ヰ文。の。脉。小。あ。が
く。く。ぬ。半。ハ。ま。か。祭。歌。小。も。ま。つ

一本。文。の。傍。小。も。ま。つ。俗。言。の。説。信。ど。も。ハ。既。す。よ。そ。の。信。行。義。と。危。き。だ。
語。歌。と。号。け。く。づ。ち。小。や。宿。の。本。お。も。と。お。と。これ。も。皆。お。も。と。ま。

説をあげ次第余が案をもよおして、まことにざくらに補ふ。

一 舊注新注をいそぎ、よくて説あきどじ事のせんは、其要とある半を
摘要す。また、そのまゝとて新作新小のへ。

一 餘釈語釈とも小いと解がて。條ども、諸説の説を多く舉て、後小
余が考へをほむ。併し諸説の中より、餘はらまつて、とちばやうあれば、その
よろこた説のみを考へ。他をば畧き、又彼等因縁たり。さばの説
のことを記し。づきも解がるのこころうめるハ、とて余が新のことを記し。

一 文章を批評する。我空園の書は、をきくへて、大きく今始
めてわがすまみあるをば。やまとあ紙からく。さすがふあくひく。やまと
上條よ既ひりす。もはおのかり托名どもと、よよ挙て大ひめを絶
き。それば、か學のことをせむなう。そして、目どもハ、もくとよしと
さかづふとあるもあう。又些細の語は考よりどるを用ひるもあう。

又今あくまふ、余がつくれるもあまじど、事のをあれさやうやまいたを主
とく。うあぐらふりうの例格小拘カバ、アと泥まど。又人まるくわくて
りあくむべうござ。

主客

人と人と相對ひと事ある時、やもゆとあることを主といひ、その主
くる人のきあよして對する方を客といひ、よふよくて、其所の文
小内外け差あり。又もまく段タス、小つたても主客の法あり。准スル、
かくべー。

正副

軍を出るよ。大將軍と副將軍とあるがとく。その主とある方が
正とし。それ小附屬ツキシタガの方を副とし。これよつて文法小輕重あり。

正對

人ふまれ物事ふまれ因てかどんの事を相對す。優で劣るにを正對とりづれハ、かど小對とひてもきべきほど。次に反對小むく西字を加へるのみ。

反對

されハ、やまの反うよ相對をりふ。まこと日てると夜と昼となど。やま因てかどといふも。表裏小對が反く反對とす。

照對 照應

この二つ大まき因てかど。照對ハ、一事の相似するを再びあらわして。前の事によ相對し。對へゆきいふ。ゆくへ巴日と月と東西の光をあらわすがど。照應ハ、あよゆる事の事。あへなく消失せば。再びやく脉をりゆきて。おの趣よ相應くをりふ。たと

て。なうくふくしたをうへてあるがど。些法卷中よ持小多し。

間隔

この事を語りてゆふ。一例小すづけて。いいともく煩ちくならず。只人の倦んではらひもうりて。暫く切斷く其間よ他事を挿し隔てをりふ。あくべ遠く海山をかみ小所くやま方のへりて。なうくふくしたをうへてあるがど。些法卷中よ持小多し。

伏案 伏線

あの二つが不く。因てかど。伏案ハ、矛よいづれをひらひ揃へ。ひらひに其の端をあらわすが。伏せかくす。伏線の線は系すらとよむ字小さく。遠くいそぞうの端を伏せ。そりくを繰めをうへて。未至り結び竟る時。やあづらを引バ。やあさる。やあめ悪く跡くとめや。又結構といひそろ所あるも因て數。

結構ハあざまへのむ。

抑揚

抑ハあさかと揚ハあざととす。文の勢をなほ法あり。あとバ
柄確の頭カラウスを揚んとて、ハモ尾サキをはよく踏抑アシタガシ。事アシタガシ
らばほよく揚アシタガシてほんとく。あづきを抑アシタガシかくをりう。

緩急

字のどく緩ユルきと急セキとと其事を叙ナフと。緩ユルき時ヒメカハ静シタカて。
なぐれ春日ヒマツキのうつうある小處コトコト女子の野邊ノハラをやくざヤクザ。急セキ
時ヒメカすゞやうかハヤカて。野分ノハラの風カキは、梢シテをやうにそよごソヨゴと。各
そよふあざひてせぎぬ矣ナリ。

反覆

事の急ヒカふうヒカがたりて。おの勢ヒツカふいヒイくを云ハシラギと

あう反覆ウツカヘして。又々人ヒトよりひのかねると等シカせんシエンとあくべ
あくふすウツカヘする月ツキ朝アサヒの俄ホリかたカタりて。并ハシラギて。や
もとめくら夕立ハシラギのあれ。うちまち小雨ハシラギあくアクんアシタガシ。

省筆

事の長ヒロうヒロをいヒツカく約ヒツカく。前後アヘタのすスよヨうウて。かくと
るんヒツカく。むしヒツカく。他ホチ少ヒツカく。あくヒツカく。人のね後の中
よりそく。も詠ヒツカをあくヒツカめ。或ハシラギ煩ハシラギをいヒツカて省ヒツカく。が
類ヒツカをすべて省ヒツカ筆ヒツカといふ。

餘波

大ヒツカじ記事ヒツカを去ハシラギて。後ヒツカ半ヒツカをすスり。りあく消失ハシラギんハシラギと
惜ヒツカみて。ちうヒツカれヒツカど出ハシラギて。引延ハシラギる類ヒツカを。餘波ハシラギも。も
ちくヒツカか。大波ハシラギの門ハシラギ。江ハシラギ小。桂ハシラギ。波ハシラギ遠ハシラギ浅ハシラギ。

小瀬の送りて。やるく小引をもとめよ璧へそり。

種子

これれのね徳お間つたる時より「ツトウサク」の名の種子と
ちうて若紫の雀子。女三宮のかゝ猫の鄰ひあり。

報應

あきハいそゆるかの、報の應どり。此事の報小彼事をあうり。
カの道理を均一もとく。

諷諭

今現あらわしあるす小諷ヨリ。一つの事ことをあくつ出だす。かのとくうと
諭サトをそりよざの二ツハ。作者フリスレの心こころ中なかあくすあくすとオレ推量すうりょうてス。

文脉

語脉

文脉ことぶとハねりてゆく文章のすらぎといひ。語脉ハ語のゆきゆく

さもうちをりよ。此こそらうの續つづきて。事ことをと通スル。人身よ
脉ま脈マ、ゆく。体中みうちを要いのちを通スル。又伏線の條理を。脉と
いひく。ふもあきあき。どとハ別事コト。

首尾

事ことの始と終と。これハ首尾あひあひて結ぶ。不りあり。下すよ。まま。
正ただくハ首尾相應あひあひ。ハハななねねとたくく。どど。皆みないい
かかく。小こほほく。首尾とあくく。これより下ハ舊注ごしゆどもふいそれ
くる名目なめいめいのままああ。

類例

其事其語の比例ひ。他たままの語ご。まま奇きああととりりる。類例るいれいと
いひああ。ままハ注法しゆぽうの同だ。

用意

こよきハ作者の言ふと用ひ、又ふれまつてす。あくまくことわたり
あくまく成いしなくひきとりきとへばやはるのをあくまくして
けりうらうを用ひありあどりく用ひめど。

草子地

物語の中あく人のんほりで他より詳じる所を草子地と
りす。こよきハ物語する人の語よどりかゝる、作者の語よどみの中を
草子地あぐら。あぐらも物語の中ほんの公ふたりてりふ所なり。
また物語の中あく人比向あぐら。実ハ草子地トうりてあり。さひ
こくしづ。

餘光 餘情

餘光ハ少もひと訓むきて文外小考あらひて、じひあくぬ味ひあるが
賞てり。舊餘情ハ今半身ハナをもふ。於てあくあれの合まりで
くるりかどくは詳せんとあよ。どうりゆるのみ。

此れもあくあくれど、ふくをそむけたのこも。他ハ准へてもさざるべし。

本文譯注凡例

一些物語の本筋りハ、玉小柿云々がハモー。河内牛とりひとと表紙とりすと。
大うそ二やうそ一とぞ。やうそ小字之家、中納云のがあるをもへ。ちうそ落抄が、
べくよだり書きといふべく書くが、まことに表紙のうそはとられるとすな
ハいよどや。じまよだがふかねよとあくふかふかと。どうもすくもすくま
ごきがくかくへどとおふよよかと。どうもむづきがふかねよと。と
いふもどり。むづきがくかねよと。がくかねよと。がくかねよと。あ
内本ハおのづくせよかと。やうそがくかねよと。あくまくと。あくまく

異アリタル事も今世ハトモ。但一紹巴抄トリヲ抄ムハ。其書也紙中比ひ後の
やうあり。といへり。行方。さうぞ中比ハ。むすと山内を用ひ一は。され
バ。かくへ今セよ傳きる也。小山内をといへども。小山。そハとも。みき
かくも。あき。し。本と。あき。と。し。絵。き。じ。も。す。一。づ。の。年。も。
う。み。ふ。よ。た。う。だ。あ。あ。い。ば。今。や。ヰ。文。ハ。互。よ。校。へ。合。せ。て。そ。の。よ。う。一。に
方。小。山。内。定。め。す。そ。の。ど。も。ハ。萬。水。一。露。湖。月。抄。の。本。を。そ。ぐ。め。て。あ。小
ね。あ。り。板。本。五。教。だ。う。つ。古。き。写。本。二。三。教。を。校。へ。合。せ。る。ふ。玉。
梓。小。校。正。され。ると。餘。滿。小。を。か。り。出。る。と。は。あ。ひ。す。ぐ。て。用。ゆ。
な。不。ひ。く。あ。ま。り。か。め。み。バ。よ。に。本。ど。り。あ。う。べ。く。み。と。の。が。り。と。な。と。バ
い。う。そ。ぎ。ん。後。の。人。を。や。よ。く。校。へ。至。る。

一校。へ。合。せ。る。事。文。ハ。余。ゲ。ト。と。や。く。方。小。の。従。り。く。わ。の。一。つ。き。ど。彼。此。
ノ。ミ。ク。の。く。ぶ。り。ぬ。事。吳。本。の。う。き。も。右。旁。カ。タ。小。注。して。イ。云。く。と。あ。る。

一。誤。ま。ア。ト。と。や。く。る。ハ。コ。ジ。ア。モ。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。
は。て。ま。ア。リ。と。る。と。運。ま。る。數。ハ。い。と。多。ク。見。バ。と。ふ。か。き。く。う。と。の。と
や。う。く。き。う。に。方。ハ。か。き。り。つ。又。は。沿。か。ど。の。ま。が。か。き。の。辞。ハ。古。に。写。キ
ど。も。よ。ハ。大。き。と。省。く。る。所。と。記。し。事。ど。こ。事。小。よ。う。と。竟。か。ハ。て。小。き。は。の
格。を。そ。入。得。て。き。の。ま。ね。す。も。非。ま。ア。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。ー。
ク。に。く。う。と。れ。ハ。古。き。文。ハ。う。き。れ。ど。ち。う。得。く。よ。う。ハ。ま。ま。わ。く。れ。ば。之。
一本。文。小。脱。る。語。あ。り。と。見て。と。ふ。く。小。義。の。貫。う。ね。所。よ。ハ。が。り。よ
か。か。め。ど。と。た。標。を。い。ま。く。教。よ。や。も。か。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。見。ゆ。る。か。の。よ。ハ。も。だ。く。□。か。く。の。と。た。標。を。圓。と。と。と。と。と。と。と。
省。き。ス。う。か。き。と。な。く。て。ハ。え。あ。ぬ。語。の。税。と。う。と。と。や。所。よ。ハ。試。よ。や。信。成
補。ひ。く。○。か。く。の。と。た。圓。の。ゆ。小。記。し。と。れ。う。ま。や。し。と。と。と。と。と。と。と。と。
一假。字。ハ。大。う。古。小。隨。ひ。く。あ。く。あ。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。

諾をもべあどいよへうとしりへ矣語を。むといふ數ハ此の後もき
くる比も既うちかくとおぢみて。和名抄甚解ホカの力のふも。むとある
うきよへ。此の後ハ既小訛ヨコナと頗クツきる音便の詞。又字音モジゴエの語がどくも。
さあがくかききる例あきだ。こまくも皆むめむよとゆふ。むと
かくべきてこまくもあきだ。さてハ初学の事あれ見てまとべたくもひ
ともなうんうとく。わうとかける數シマシタクもきり。これらハ作者ツイタヌシ
言ふべき事シテありモジド。紫書ハ初学の事シテ。本文をよ
譯シツして注シテ。いどひとあきバ。この後からやしりとぬあらゆる
語の清濁も。大さ古スミニヤリ、小隨スミニヤリ、急スミニヤリをくらへす。またもはうの事シテ。不知シテ
ぐれにハ多くハ清スミニヤリものあふへて。おまく。

一 尔有宋里ニアルメリをなんあり。何止ナニトをなんど。有辨伎アリベキをあんべたどりふ數シ。みか
音便スミニヤリふくびきの語ふきど。此の後ハそのせれ俗語の事シテ。みかれシテ。

かきバ。初よりかくふへと。ま年シヤウ六ロク聊カも改めば。さて舊シテ。あ
あそり。あと。あぐいときるを。んを加へよみあへまう。これ、やせの
詞つを失シテ。とそのまことやきバ。片假字のシを加へく。そのよシを
をかく。あづつれどもくふをかく。ひづれどもくふをかく。ひづれどもく
いづれどもく。を加へるふよむべ。此數シマシタクも。泣シテ。泣シテ。泣シテ。泣シテ。
うれくふくふくあくふく。うれくふく。うれくふく。うれくふく。うれく
も音便の事シテ。諸本シテ。うれくふく。うれくふく。うれくふく。語
調のよろしくよもく。うれくふく。うれくふく。うれくふく。うれくふく。

一 本文の左旁小譯語を力のきくと。ハとく俗びるちりを。小て識者モノシナヒトのち
ももんともかく。うへきとく。うへきとく。雅云の耳ミヤコトをく。事
事のうへきとく。うへきとく。うへきとく。うへきとく。うへきとく。語
を語のうへき。本文の旁小記シテ。うへきを見てかくして。いとせりよりよ。と

りの人がいる。もと本のまゝ小形エラフをつゝかせば、やうより識者ふた
あべたものばかり。よどいとうひ學モードルのま、さてハ女童がゐる。あとゑん
やうて解サトるべからくいふもとらで、さうりきはあります。千年からうに
雅言エラフと今世の俗語サドヒラバ小譯ウツバ一とく。決くやうふへんと、先まもり、
ごくだらく、容易タガヤハうぬきもあきば。ほくめて先達の御モジおもす旨よ
りとづて、余オホ考カシをもくらむと、だまのまわらえあると多くく。
全く相當らぬすどりあり。故おあくね下カレハ、雅言一説よ、俗云を二
語であげて、そまく、その他のことを下シテまきて、こやうべしよ。それで
御モジ詠ウタ小某モジ、とくふ泡カクちう。さて又漢字カラモニを
交モジけ、いと逆ウタクのまゝあると、今世へもぐくこの漢字れ
うくわく。ようげを通モジめタクめタクだ。大くよかくべにきう。
約モジやうある。代モジきんとモジく。ひく注モジづけモジく。まことに、
あべて俗小用モジひ

かまつるが、あくは、やうの本義モトコヒ小ハ、どうするふくなら
よーとう、極モジど、正モジく相當。字モジして注モジする時、却モジて和字モジのま
うもくたまも多き。巴モジ字モジをひきとひきとひんざれど、飾モジりふ
く。かくとひきとひきとひく。じくらむもひいて記モジす。またが文の右旁モジ注モジ
するハ、じぎもも字モジの音モジなりともべ。

一 略、お序モジを講説さんとす。小ハ、雅言と俗言とあひきのよべたやうと。初
よりくらへて、あとざき。和人モジのまと、聽モジく人のまと、い
くべきよとあり。うまくその文のまと、侍へ受モジることうべ。然モジハ
むのまき年ごろ試モジをさかまつる。うまく本のあよハ、些モジ細モジい。但モジも、
いまくらやうある。りよべたや。こよハつてふりゆく。
此物語の文章ハ、うづくらへて、うづくらへて、よく行モジおき、やうかる
小ゆのせられても、彼モジと、事のかまつて、所モジよき、やうかる

けらめなうて、かくとくハーブルもとすのやうあり所あり。まことの文、序も、ううへよおへて、倍勢をあやあきする所と多くがり、さうへざり小ゑくハ、さのすもくねることもある。又かかげらふりべた本を、じつもく後へまうして、もと本とゆるさぬがれする所からく甚しき所に紙一かじ二ひきをとて、わいどもともさとうぐに半じもゆべし。こまつあごう、わいどもともくもくとくもくとくもくとく。文章の法とすらこまう。おまくとも、初学の半ばこまう。とくまくは、假小の標カリシをほもく。やむりがれを示さんとく。これちと漢文の例とあくまでもうかたなきとく。とくまく新釈よおどく。されともちとまく。事をまくくつづけどもくふまくとく。

『大段落の標ハシ

一事を全く悟で竟する界小此標をわのとく。

— 小段落の標

一事はちとく竟する所の界、かく小此標をわのとく。まとも皇國言のみかハ、漢文のどく、まへやくよかくとなど所もあゝきば。されば、だらうれ様とんじべー。次あくも固ド。

○ 彼と此と事を分つ標

彼と此と、自と他と、事のかくる所、又問答のかくる所、りき所、まこと此事をあくくさうあたゞく。彼事を抑サブする所がくの界、ふがく點をかく標とく。

○○○○ 眼目の語法標

こきハ漢文小字眼あくまほひとく。其所よもひとある語、或はは文字多くつひく。うたをあやあく語。うちハ伏線の脉を徒ホロぐる語かくの右旁よかく點を用ひく標とく。委々くハモ

所の點カタカタをバシマシナ.

・・語の清濁比標

濁ミコトる所は點カタカタハ常ノリの所トコトコ. 必清スミてよもじに達スルを俗小濁ミコトすあれ
語カタカタ. 點カタカタをやどして. そ活スムばたすを示スル.

・・助辭獲語の標

助辭獲語ヤヌメヨトバキレトドの所カタカタをよハ. 左旁カタかカタ點カタカタをちくら.

こきカタカタいとあるてカタカタをはの係カリと結カタカタとの標カタカタへ. 所の所カタカタ
ちカタカタがやうの點カタカタを右旁カタかカタ點カタカタを示スルれよ. 依て語脉コトスナを起スルむ
べし. こきカタカタと要スルも.

語脉轉倒の標

語の脉カタカタを上下カタカタ小轉倒ウチカタにて. 文勢カタカタをなカタカタる所カタカタをよハ.

かくのカタカタ點カタカタを右旁カタ小引カタて. 其語の脉カタカタを示スル. こカタカタ點カタカタはまれカタ
所トコトコを繼カタカタて. もとカタカタバ. 相重カタカタのカタカタめよ. 每小カタカタの方カタカタいよ
のカタカタよりカタカタ小カタカタて. おやうちカタカタし. さカタカタあカタカタて. ものカタカタもカタカタ
やカタカタれる. ほカタカタくカタカタもカタカタおカタカタび. 俗本カタカタのカタカタ見カタカタをも. やカタカタて. かカタカタひ
きカタカタとカタカタとある. まカタカタあカタカタハ. いカタカタへのカタカタよカタカタある. かカタカタて. 俗本カタカタの儀式
をもカタカタあカタカタきカタカタをカタカタづカタカタく. 語脉カタカタあカタカタよ. おカタカタおカタカタうカタカタの
手カタカタを拂カタカタて. 語脉カタカタあり. されば. 点カタカタをつカタカタて. もカタカタをこカタカタる. そ
小方カタカタかんとある. なんカタカタかカタカタあカタカタきカタカタどカタカタ. ある不結カタカタかカタカタて. みよ
ハカタカタといカタカタとカタカタと轉カタカタ. どううけカタカタにカタカタけカタカタよカタカタさカタカタせカタカタバ. 」
かる点カタカタをつカタカタく. もカタカタ尾カタカタをカタカタし. もカタカタよカタカタあカタカタて. とある. ふカタカタての辞
ハカタカタとカタカタへカタカタへ. 係カタカタの脉カタカタをカタカタかカタカタんとカタカタ. ① ② の點カタカタを左
旁カタカタし. 俗ハカタカタよカタカタ准カタカタくカタカタあカタカタべ. 語脉カタカタのカタカタ

所よハ。——かく二筋の點を引きて、そのすぢを詳すに些々付ふ
ふをほりてかうづべ。大くも此の語のすぢより所くも。
此法をあらびして、よのづみれまると、むぎじと、さざかうづべ
よまんとするふ本のきをすへぐれだぞり。さきバ付ふよく
お悔ひべき。

① ② ③ ④ ⑤ 蘭句文脉の標

こきはいせゆる蘭句法の遠く係くる所まで上より受け文脉を
あらめんと小係にて断る下小甲をもす。受て継ぐる小②
をもす。この點を引合せく其文の係する意を解べ。二重小
も二重小句を置く。所よハ。④ ⑤ ⑥ ⑦ たゞ記して、文脉をもつ。

△ 語意を補ふ標

いひ切る語の末ふ含めのくじるを。又今世の語ふてハ、必竟を加へて

きくじ見所かどふ。やを左旁か注もろ小。他の説法と約まらず
がくらにがく點の中小ちよ。この中ある説め意を抑ひ補ひ
て。その文を解べ。いと長尺を比合やうする。別小段落の
取ふやをり。

右の外ふも聊づの注例あらじと准へてもさふべ。舊印本をと
ふくの心詞おふよハ。某心某詞とあら。草子地よハ。地ともうけ數ハ。づ
きも改めば。りうのふよ。へうる点をかくすも。湖月抄の例あらへ
すじも。上條よりすがごや。

校正譚注源氏物語評釋首卷

終

